

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：24402

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660108

研究課題名(和文) 地域高齢者見守りに対する住民意識向上のための教育啓発プログラムの効果評価

研究課題名(英文) Evaluation of effects of educational program promoting sense of watching elderly neighbors on community-residents

研究代表者

河野 あゆみ (Kono, Ayumi)

大阪市立大学・看護学研究科・教授

研究者番号：00313255

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、地域高齢者への見守りに対する住民意識の向上を図る教育啓発プログラムを開発し、その効果について評価を行った。プログラムは、「認知症高齢者への見守り活動」や「高齢者の地域見守りの必要性と意義」をテーマとしたグループワーク・セッションであり、独自に作成した視聴覚教材を用いた。延べ94名の住民に開発したプログラムを試行した結果、住民の理解度は高く、地域高齢者の孤立を防ぐために社会資源の活用や専門機関との連携などの必要性に関する意見を住民から引き出すことができた。今後は本プログラムの効果について住民の地域高齢者見守り行動の向上や虐待・孤独死等の発生状況に着眼して評価を行う必要がある。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to examine the effects of education programs promoting sense of watching elderly neighbors among community-residents. The programs included small lecture and group-work session, which theme are "watching elderly neighbors with cognitive decline" and "significance and necessity of watching elderly neighbors", utilizing audiovisual education materials which we have developed in the present study. We have testified the programs to a total of 94 community-residents and found that participants were comprehensive regard to the programs and they revealed that utilizing resources or cooperation with professions and residents to prevent social isolation should be needed. Further investigation would be focused on effects of the programs, including compliance of watching behavior to elderly neighbors on residents or occurrence of elderly abuse and solid death.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：地域看護学 地域高齢者 住民 教育啓発 孤立

## 1. 研究開始当初の背景

近年、地域高齢者をめぐる虐待や孤独死などが社会的問題として、取り上げられてきている。地域高齢者の健康や生命を脅かすこれらの問題の背景には、地域内での人間関係が希薄化し、人々同士の信頼関係やソーシャル・キャピタル(人間関係資本)が低下しているため、高齢者やその家族の閉じこもり傾向や孤立が一層進んでいることが指摘されている。

地域高齢者の閉じこもりや孤立を予防し、解決するための方策の一つとして、近隣周囲で暮らす地域住民が高齢者の見守り活動を行うことによって、高齢者が身体・心理・経済的困窮に陥る前に早期に発見し、地域包括支援センター等の専門機関につなげることが挙げられる。また、2014年10月1日現在、わが国の全人口における高齢化率は既に24.1%にも達しており、介護保険制度による居宅サービスなどフォーマルな保健医療福祉資源のみに頼るには限界があり、住民同士のインフォーマルなサポートの提供システムを構築することも視野にいれることが重要である。

地域高齢者に対する見守り活動の具体的な内容としては、住民が高齢者宅を訪問して交流を図ること、住民間で仕組みをつくり、高齢者等の緊急時の連絡先などを把握し、必要時に活用すること、住民間で高齢者等の安否確認を常日頃から行い、必要時、専門機関や家族等に連絡を行うこと、ゴミ出しや買い物の手伝いなど、支援が必要な高齢者の日常生活に関するボランティアやサポートを行うことなどが含まれると考えた。

これらの地域住民による高齢者見守り活動を展開するためには、住民の地域への愛着や帰属感などと定義されるコミュニティ意識を活性化させるとともに、地域で「適度な世話焼き」が可能となる人間関係をつくることの必要性が一般的に認知され始めてきている。また、全国各地では、市町村自治体や地域包括支援センター、市町村社会福祉協議会などが民生委員、福祉ボランティアや自治会等の住民組織と連携しながら、地域特性に応じた高齢者への見守り活動などが実践されている。

しかしながら、地域住民の見守り組織の育成等を試みた地域活動報告は、散見されているが、地域住民に対する高齢者見守りの教育啓発プログラムの方法論の妥当性等を学術的に実証している研究報告は、ほとんどみられていない。

地域住民による地域高齢者への見守り活動を効果的に定着させていくために、住民自身が「地域高齢者への見守り活動がなぜ必要なのか」を理解でき、自分が暮らす地域の特徴に応じた取り組み内容や方法について、主体性を持って、考えられるようになることが必要である。そのためには、地域包括支援センターや行政機関等の地域看護職が推進役

となりながら、地域住民に対して、地域高齢者への見守りに関する教育啓発を行うことが重要である。

本研究にて効果的な教育啓発プログラムを確立することによって、地域高齢者への見守り活動を展開できる住民の志向性を養い、地域におけるインフォーマルなサポート体制の構築に役立つと考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、地域高齢者への見守りに対する住民意識の向上を図る参加型教育啓発プログラムを開発し、その効果を評価することである。

本研究の目的を達成させるために、第一段階としては、地域住民が高齢者見守りの必要性と今後の地域での取り組みについて主体的に考えられる視聴覚教材を作成し、それを活用した参加型教育啓発プログラムを地域住民に試験的に提供し、教材の汎用性を評価した(視聴覚教材の汎用性の評価)。

さらに、第二段階としては、ある地域の住民に対して、ミニ講義と視聴覚教材を用いたプログラムを提供し、地域住民の高齢者見守り意識の向上への効果について、定量的に評価することとした(教育啓発プログラムの効果評価)。

## 3. 研究の方法

### (1) 視聴覚教材の汎用性の評価

#### 視聴覚教材の作成

地域住民が認知症高齢者への見守りに関する適切な考え方を学習することをねらいとした視聴覚教材を作成した。

視聴覚教材を作成するにあたっては、地域包括支援センターや行政の高齢者介護部門の看護職や福祉職にインタビューを行い、住民による見守りが必要であった高齢者の実例などを数例把握した。インタビューで把握した実例をもとに、研究者らでシナリオを作成した上で、専門業者等に依頼して動画による視聴覚教材を作成した。

さらには、作成した視聴覚媒体の内容から、住民から地域見守りに対する適切な考え方を引き出すためのクエスチョンを考え、視聴覚教材を用いたグループワーク・プログラム「認知症高齢者への見守り活動」を作成した。

#### 視聴覚教材の汎用性の評価

視聴覚教材の汎用性を評価するために、2012年9月に、A町の民生委員39名を対象者として、グループワーク・プログラム「認知症高齢者への見守り活動」を試行した。

評価方法としては、プログラム実施後に対象者に対して、質問紙による調査を行った。調査内容は、対象者の基本的属性のほか、日常の認知症高齢者へのかかわりの程度、認知症高齢者介護の経験、認知症への関心の程度、視聴覚教材の評価について5項目、プログラム全体への評価について2項目を把握した。

視聴覚教材やプログラム全体への評価については、各項目「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の4段階のリッカート式評価を行った。なお、質問紙は、無記名で回収した。

#### (2) 教育啓発プログラムの効果評価

教育啓発プログラムについては、ミニ講義と既存の視聴覚教材を用いたグループワーク・プログラム「高齢者の地域見守りの必要性と意義」を作成した。ミニ講義は、地域での高齢者の見守りの必要性、地域高齢者の健康レベルと地域見守り、地域とともに考える見守り活動とから構成される3つのフレームワークを組み立てて進めた。

既存の視聴覚教材の内容は、セルフ・ネグレクトの状態にある独居高齢者が別居する息子家族や近隣の住民がかかわることを拒否し、孤独死に至るといったものであった。グループワークでは、「なぜ、この事例が周囲に助けを求められなかったのか」と「孤独死を発生させないために地域や近隣でどのような取り組みをしたらよいのか」という2つのクエスチョンについて、対象者に話し合ってもらい、研究者がフィードバックを行った。

これらのプログラムを評価するために、2013年9月に、B市の地域住民55名に対して、試験的にプログラムを提供した。なお、実施に際しては、55名の対象者の居住地区によって2グループに分け、同一内容のプログラムを2回提供した。

評価方法については、グループワークやフィードバックでの参加者の発言内容を記録し、まとめた。

#### (3) 倫理的配慮

本調査の目的、趣旨とプライバシーの保護について、文書と口頭で説明し、同意を得た。得られたデータについては匿名化して分析を行うこと、データについては目的以外では使用しないこと、研究協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止可能であること、研究に参加しなくても不利益は甲村いないことについて、説明を行った。

なお、質問紙調査については、質問紙を提出することによって、調査協力の同意を得たものとした。

### 4. 研究成果

#### (1) 作成した視聴覚教材の概要

作成した視聴覚教材のタイトルは、「ご近所が気づく認知症のサイン」である。具体的な内容は次のとおりである。まず、未婚の息子と暮らす日中独居の高齢女性が消費者被害や物盗られ妄想、徘徊などの認知症の初期症状を呈するようになる一方、息子は、母親の状況に困り、鍵をかけて母親を閉じ込めるといった行動をとる。その様子を近隣に暮らす住民がおかしいと感じるといった内容である。本教材では、異変に気づいた近隣の住民がど

のかかわるべきか、参加者からの意見を引き出せることを想定して、教材中で情報を提示した。

また、教材の随所に、視聴者が認知症の初期症状が理解できるように「気づきのポイント」を挿入した。教材の持続時間は約10分程度とし、高齢の視聴者に理解しやすいように、言葉の言い回しや媒体の表示方法などについて工夫を行った。

#### (2) 視聴覚教材の妥当性の評価

グループワーク・プログラム「認知症高齢者への見守り活動」において、視聴覚教材の妥当性を評価するための調査対象者39名のうち女性は79.5%であり、年代は50代が15.4%、60代が48.7%、70代が33.3%であった。対象者のうち、認知症高齢者と現在かかわっている者は43.6%、認知症高齢者介護にかかわったことのある者は46.2%であった。認知症に関心や興味のある者は92.3%とほぼ全員の対象者が関心や興味を持っていた。

視聴覚教材に対する評価については、登場人物の会話内容についてわかりやすかったと回答した者は97.5%、物語がわかりやすかったと回答した者は74.4%、認知症のサインについて理解できたと回答した者は97.5%、近隣で実施に起こりそうな内容だと思った者は89.7%、認知症高齢者へのかかわり方に役立つ内容だと思った者は89.7%であった。

プログラム全体への評価としては、認知症高齢者への地域見守り支援について理解できたと回答した者は94.8%、プログラムは面白かったと回答した者は97.5%であった。自由回答としては、「視聴覚教材を多く用いた研修を行ってほしい」「グループワークで何をしたらよいかとても良くわかった」という意見がみられた一方、「視聴覚教材に判断材料が多く持てるように情報をもう少し多くしてほしい」「登場人物の性格や生活背景等が不明なので解決手段を考えるには少し足りない」という意見もみられた。

#### (3) 教育啓発プログラムの効果評価

グループワーク・プログラム「高齢者の地域見守りの必要性と意義」については、対象者55名から、次のような意見がみられた。

まず、「近隣のつながりが低下する中、地域で起きていることを発見するために社会資源を活用する必要性」が挙げられた。具体的には、「自治会組織等を活用して毎月65歳以上の高齢者全数に訪問を行う」、「地域で行事を行い、閉じこもりを予防する場やチャンス企画する」、「新聞や飲料の配達者と連携して、要援護者の状況を把握する」などの意見がみられた。

第二に、「困難な問題には、地域包括支援センター、行政、医療機関などと連携し、専門職が介入できるように住民から情報提供等を行う」が挙げられた。具体的には、「住民では対応できない場合は、地域包括支援

センターの相談窓口などの専門機関をうまく活用する」、「見守りを拒否する高齢者には、地域包括支援センターや社会福祉協議会などに連絡して、対応してもらおう」などの意見がみられた。

一方で、「孤独死などは本人の問題であるので放っておくしかない」や「行政が孤独死の危険のありそうな住民をみるべきである」など否定的な意見もみられた。

(4) 得られた成果の位置づけと今後の展望

本研究の特徴は、支援が必要な地域高齢者ができるだけ自立して在宅生活ができるためには、地域住民の見守りが必要であると考え、地域高齢者への見守りに対する住民意識の向上を図る参加型教育啓発プログラム開発を試みたことである。

本研究では、地域住民が地域で暮らす高齢者の生活や見守り活動に関心を持つことができる視聴覚教材やプログラムを作成し、その汎用性を評価した。その結果、参加者のプログラムの理解度は高く、住民から地域での孤立を防ぐために社会資源を活用する必要性や専門機関との連携などの意見を引き出すことができた。

今後は、これらの教育啓発プログラムを地域で提供することにより、住民の地域高齢者に対する見守り行動が実際に活性化するのか、さらにはその地域における閉じこもりや孤立を原因とした虐待や孤独死が予防できるのか、という観点から効果評価を実証的に行うことが必要と考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計17件)

金谷志子、河野あゆみ、津村智恵子、訪問看護師病院滞在型相談プログラムのプロセス評価:訪問看護師の相談対応の重要度・達成度の認識の変化に着目して. 大阪市立大学看護学雑誌.2014;10:11-18. (査読あり)

田高悦子、河野あゆみ、国井由生子ほか. 大都市の一人暮らし男性高齢者の社会的孤立にかかわる課題の質的記述的研究. 日本地域看護学会誌.2013;15(3):4-11. (査読あり)

金谷志子、河野あゆみ、津村智恵子、訪問看護師病院滞在型相談プログラムのアウトカム評価:病院スタッフの訪問看護連携の重要度・達成度の認識の変化に着目して. 日本地域看護学会誌.2013;16(1):56-62. (査読あり)

Kono A, Kanaya Y, Tsumura C, et al. Effects of preventive home visits on health care

costs for ambulatory frail elders: a randomized controlled trial. Aging Clin and Exp Res.2013;25(5):575-581. (査読あり)

久乗エミ、金谷志子、河野あゆみ、高齢者のセルフ・ネグレクトに関する地域住民への教育プログラムの試みと有効性の評価:エンパワメントを促すグループディスカッションの活用. 日本地域看護学会誌.2013;16(2):32-38. (査読あり)

Kono A, Tadaka E, Kanaya Y, et al. Development of a community commitment scale with cross-sectional survey validation for preventing social isolation in older Japanese people. BMC Public Health. 2012;12(903). (査読あり)

河野あゆみ、田高悦子. 大都市に暮らす独居男性高齢者の生活課題と自立支援. 公衆衛生. 2012:76(9):702-705. (査読あり)

丸尾智実、河野あゆみ、地域住民を対象とした認知症の理解促進プログラムの試み-プログラム実施前後の質問紙調査による評価. 日本地域看護学会誌. 2012:15(1):52-60. (査読あり)

高岡幸枝、河野あゆみ、人工呼吸器を装着したALS患者の介護者の介護認識に関する調査:人工呼吸器装着選択状況からの検討. 訪問看護と介護. 2012:17(8):712-717. (査読あり)

金谷志子、津村智恵子、地域高齢者が安全に生活できるための地域住民による高齢者見守り活動の特徴. 大阪市立大学看護学雑誌. 2012:8:17-23. (査読あり)

濱吉美穂、河野あゆみ、認知機能低下を想定したAdvance Directiveの作成意義と可能性に関する文献検討. 大阪市立大学看護学雑誌. 2012:8:39-47. (査読あり)

Kono A, Kanaya Y, Fujita C, et al. Effects of a preventive home visit program in ambulatory frail older people:a randomized controlled trial. J of Gerontol: Med Sci. 2012;67A(3):302-309. (査読あり)

田高悦子、河野あゆみ、国井由生子ほか. 大都市における一人暮らし男性高齢者の地域を基盤とした自立支援プログラムの開発と有効性の評価. 日本地域看護学会誌. 2012:14(2):53-61. (査読あり)

河野あゆみ、閉じこもり高齢者の事例と

ケアプランの作成 . Aging&Health.  
2011:20(3):25-27. ( 査読あり )

藤田 俱子、河野あゆみ、丸尾智実ほか .  
独居男性高齢者を対象にした食事バラン  
スガイドを用いた健康教育の試み . 日本  
地域看護学会誌 . 2011 : 14(1) : 49-54 .( 査  
読あり )

山崎由美枝、河野あゆみ . 青年海外協力  
隊看護職帰国隊員のコミュニケーション  
スキルの変化 : 派遣中と派遣後に焦点を  
あてて . 保健師ジャーナル . 2011 : 67(8) :  
714-720 .( 査読あり )

木村千絵、河野あゆみ、金谷志子ほか .  
在宅で老親を介護する未婚子の介護生活  
への対応と介護観 . 訪問看護と介護 .  
2011 : 16(8) : 663-668 .( 査読あり )

[ 学会発表 ] ( 計 22 件 )

丸尾智実、河野あゆみ . 家族介護者を対  
象とした認知症の症状に対応する自己効  
力感向上プログラムの効果;実施前と2か  
月後の質問紙調査による評価 . 第 18 回日  
本在宅ケア学会学術集会 . 2014 年 3 月  
14-15 日:東京 .

海原律子、和泉京子、金谷志子ほか . 在  
宅虚弱高齢者の生活上の課題と継続した  
予防訪問によるその解消状況 . 第 18 回日  
本在宅ケア学会学術集会 . 2014 年 3 月  
14-15 日:東京 .

金谷志子、和泉京子、河野あゆみ、津村  
智恵子 . 在宅虚弱高齢者への予防訪問プ  
ログラムの介護給付費に対する影響;無  
作為化比較試験 . 第 33 回日本看護科学学  
会学術集会 . 2013 年 12 月 6-7 日:大阪 .

丸尾智実、河野あゆみ . 家族介護者を対  
象とした BPSD に対応する自己効力感向  
上プログラムの効果 ; 実施前後の質問紙  
調査による評価 . 第 33 回日本看護科学学  
会学術集会 . 2013 年 12 月 6-7 日:大阪 .

Tadaka E, Kono A, Kanaya Y, et al. Scale  
development of Self-efficacy scale for  
preventing and alleviating social isolation  
among the community-dwelling elderly  
people: community volunteers. 66th Annual  
Scientific Meeting GSA. 2013 年 11 月 20-24  
日: New Orleans (USA) .

Kono A, Kanaya Y, Izumi Y, et al. A  
preventive home visit program for frail  
elders :pilot results from a randomized  
controlled trial. 66th Annual Scientific  
Meeting GSA. 2013 年 11 月 20-24 日: New  
Orleans (USA) .

河野あゆみ、金谷志子、津村智恵子 . 訪  
問看護師による病院滞在型相談のプロセ  
ス評価 : 訪問看護師の地域連携への認識  
( 第 1 報 ) . 第 32 回日本看護科学学会学  
術集会 . 2012 年 11 月 30 日-12 月 1 日 :  
東京 .

金谷志子、河野あゆみ、津村智恵子 . 訪  
問看護師による病院滞在型相談のアウト  
カム評価 : 病院スタッフの訪問看護連携  
の認識 ( 第 2 報 ) . 第 32 回日本看護科学  
学会学術集会 . 2012 年 11 月 30 日-12 月 1  
日 : 東京 .

Kono A, Kanaya Y, Tsumura C, et al.  
Preventive home visit approach in frail  
elders under the Japanese long-term care  
system. 65th Annual Scientific Meeting GSA  
(symposium). 2012 年 11 月 14-18 日: San  
Diego (USA) .

Kono A, Kanaya Y, Tsumura C, et al.  
Effects of preventive home visit program on  
health care costs in ambulatory frail elders.  
65th Annual Scientific Meeting GSA. 2012  
年 11 月 14-18 日: San Diego (USA) .

Kono A, Tadaka E, Kanaya Y, et al. Scale  
development of community commitment to  
prevent elderly social isolation in Japanese  
urban area. 65th Annual Scientific Meeting  
GSA. 2012 年 11 月 14-18 日: San Diego  
(USA) .

Kanaya Y, Kono A, Tadaka E, et al. The  
effects of age and experience on community  
support among volunteer to prevent elderly  
isolation. 65th Annual Scientific Meeting  
GSA. 2012 年 11 月 14-18 日: San Diego  
(USA) .

河野あゆみ . 在宅高齢者の介護予防 : 尿  
失禁へのアプローチ . 第 25 回日本老年泌  
尿器学会特別講演 . 2012 年 6 月 2 日 : 徳  
島 .

河野あゆみ、金谷志子、藤田 俱子ほか .  
日常生活動作レベルからみたサービス未  
利用の要支援高齢者に対する予防訪問の  
効果 . 第 31 回日本看護科学学会学術集会 .  
2011 年 12 月 2-3 日:高知 .

河野あゆみ、金谷志子、藤田 俱子ほか .  
要支援高齢者における介護保険サービス  
利用と 2 年間の身体心理社会的変化 . 日  
本老年看護学会第 16 回学術集会 . 2011  
年 6 月 15-17 日 : 東京 .

丸尾智実、河野あゆみ . 地域住民に対す

る認知症啓発活動の長期効果の検討．日本老年看護学会第 16 回学術集会．2011 年 6 月 15-17 日：東京．

Kono A, Kanaya Y, Fujita T, et al. Effects of a preventive home visit program on QoL and care costs in ambulatory frail elders. 64th Annual Scientific Meeting GSA. 2011 年 11 月 18-22 日:Boston(USA) .

Kimura C, Kono A, Kanaya Y, et al. Caregiving view of the unmarried adult child caregiving for elderly parent living at home. The 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing. 2011 年 7 月 17-18 日:Kobe(Japan).

Fujita T, Kono A, Kaji Y, et al. Health education using scenarios to understand self-neglect. 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing. 2011 年 7 月 17-18 日:Kobe(Japan).

Kono A, Kanaya Y, Fujita T, et al. The process of preventive home visit program in ambulatory frail elders. 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing. 2011 年 7 月 17-18 日:Kobe(Japan).

- ⑳ Maruo S, Kono A. The revised scale for caregiver self-efficacy in Japanese version:reliability and validity studies. 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing. 2011 年 7 月 17-18 日:Kobe(Japan).
- ㉑ Kanaya Y. Effects of program that promotes self care of middle-aged and elderly women with knee pain. 2nd Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing. 2011 年 7 月 17-18 日:Kobe(Japan).

〔図書〕(計 3 件)

河野あゆみ(共著). 在宅看護．公衆衛生看護学．津村智恵子、上野昌江編．東京：中央法規出版．2012：138-173．

金谷志子(共著). 健康教育・学習，地区活動の実際．公衆衛生看護学．津村智恵子、上野昌江編．東京：中央法規出版．2012：244-253．

河野あゆみ(共著). 高齢者のプライマリヘルスケアにむけた地域の把握と診断の展開．地域看護診断(第 2 版)．金川克子、田高悦子編．東京：東京大学出版会．2011：101-119．

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕  
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

河野 あゆみ(KONO, Ayumi)  
大阪市立大学・大学院看護学研究科・教授  
研究者番号：00313255

(2)研究分担者

金谷 志子(KANAYA, Yukiko)  
大阪市立大学・大学院看護学研究科・講師  
研究者番号：00336611

津村 智恵子(TSUMURA, Chieko)  
甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授  
研究者番号：4026824